chojiai.jp

はるばあば、

こうしてお別れを申し上げる日が来たことを、まだどこかで受けとめきれずにおります。けれど、ばあばがいつもそうしてくれたように、静かに深呼吸をして、心を整え、言葉を選びながら、お礼とお別れをお伝えいたします。

宮城・石巻の風のこと、ばあばはよく話してくれました。和裁を学び、結婚後は町の仕立て屋として、季節ごとの布と向き合い、ひとの暮らしに寄り添う針を進めてこられました。震災のあと、炊き出しの列に温かい湯気を絶やさず、近所の子どもたちには、毎年浴衣を縫ってあげていたばあば。茶道に親しみ、所作の意味を若い世代に穏やかに伝えてくださった姿が、今も目に浮かびます。

ばあばは、約束を必ず守る人でした。誰の話も最後まで聴いて、必要なときには半歩先に手を伸ばす。急がず、押しつけず、けれど確かに支える、その背中に、私たちは何度も救われました。

私にとって忘れられないのは、初めての夏祭りの夜です。薄紫の布が、ばあばの指先で朝までのあいだに浴衣へと生まれ変わっていく。ほどいたり縫い直したりしながら、「手をかけるほど心が伝わるのよ」と笑った声。帯の結び方を何度も練習して、結び目がやっときれいに決まったとき、ふわりと柚子の香りがして、背中にそっと手を添えてくれた温もり。あの夜の鼻歌と針の音は、今も私の中で、勇気を出すときの合図になっています。

ばあばの暮らしは、四季の色で満ちていました。庭の紫陽花、秋にはたわわな柚子、台所には保存食の瓶が静かに並び、短歌のノートには、短い言葉で大切な景色がしまわれていました。日々を丁寧に重ねることが、こんなにも人を強く、やさしくするのだと、ばあばが教えてくれました。

chojiai.jpであなただけの弔辞を作成

ご家族の皆さまに、心よりお悔やみを申し上げます。夫・一郎さんを先に見送り、長男・健さん、長女・雅子さん、そして四人の孫、二人のひ孫を、はるばあばは深い誇りで見守ってこられました。どうかご無理をなさらず、支え合いながらお過ごしください。ばあばが病室で微笑んでくれた「無理しないで、よく食べなさい」という言葉を、私たち皆の合言葉にし、今日からの暮らしの中で守っていきたいと思います。

台所から聞こえる鼻歌、柚子の香りのする抱擁、話の終わりにそっと手を重ねてくれる仕草、そのどれもが恋しくてたまりません。それでも、ばあばが教えてくれた「半歩先」の思いやりと、「手をかけるほど心が伝わる」という信条を、私たちの手で次に渡していくことで、ばあばのぬくもりは、これからも私たちの暮らしの中にほどけずに残り続けるはずです。

はるばあば、長い年月、本当にありがとうございました。和裁の針目のように細やかで、茶の湯の所作のように美しい日々を、私たちに遺してくださいました。どうか安らかにお休みください。いただいたやさしさを胸に、私たちは前を向いて歩いてまいります。

心からの感謝とお別れを込めて。

この弔辞は chojiai.jp
で作成されました。いくつかの質問に答えて、今すぐあなただけの弔辞を作成しましょうchojiai.jp

chojiai.jp であなただけの弔辞を作成